

Y22a 研究者の生態展示 – JAXA 相模原キャンパスでの取り組み

阪本成一 (宇宙航空研究開発機構)

研究所における近年のセキュリティ強化は、「セキュリティエリア内にある公開施設」なる奇妙なものを生んだ。宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 相模原キャンパスの展示室もその一つで、年に1度の一般公開以外は引率者付きの団体見学に利用が限定されていた。しかし、実際には職員が目が行き届くため保安面での心配はなく、2007年の7月から規定の画一的な運用をやめ、平日の自由見学を開始した。さらに、職員の勤務日を振り替え展示室の相談員席で執務させることで、同年8月から夏休み期間の土日公開も実現した。併せて、スタンプラリーの設置や、職員・OBの宇宙関連蔵書の「JAXA さがみはら文庫」としての公開など、滞在時間を確保するための工夫も凝らした。

見学者に交じって研究者・技術者・学生らが徘徊する展示室は、さながら旭山動物園の生態展示のようで、研究開発の歴史や最新の成果だけでなく、それを支える人々の日々の活動を伝えている。このような公開された研究施設は、博物館とも科学館とも違う、実際に研究開発を進める現場の研究者・技術者の顔の見える生態展示となり、基礎科学研究の敷居を下げるのに貢献する。また、「見学者」のIDを下げた親子連れなどの姿を目にすることで職員も社会とのつながりを意識するようになり、展示内容だけでなく職員の意識も少しずつよくなってきた。

2008年10月にはM-V ロケット実機展示が完成し、屋外部分にも見所ができたため、規定の運用をさらに緩め、屋外展示部分のみではあるが常時公開も実現した。同年12月には相模原市や東京国立近代美術館との文化等協力協定を締結し、社会教育・学校教育を中心としたより強固な協力体制を整えた。これらの取り組みの結果、地域におけるJAXAの存在感が次第に高まってきており、その事業内容についての理解もより深まりつつある。

講演では、JAXA 相模原キャンパスの施設公開に関する最近2年間の取り組みと、その成果について紹介するとともに、予算ゼロから始める研究施設の公開法について論じる。